〈南方熊楠の生涯〉

南方熊楠は、慶応 3（1867）年、和歌山県和歌山市に生まれた。父・弥兵衛、母・すみの間には、熊楠を含め、兄・藤吉（のちに弥兵衛を襲名）、姉・くま、妹・藤枝、弟・常楠、楠次郎の六人の子どもが育った。熊楠は、8、9 歳くらいのときから、江戸時代の大百科事典である『和漢三才図会』や『本草綱目』、『諸国名所図会』などを筆写し始めている（12 歳頃完成）。両親とも真言密教を信じ、熊楠も幼い頃から、大日如来や真言についてよく聞かされていたという。明治 17（1884）年、東京大学予備門に入学。同期生には、夏目漱石、正岡子規、秋山真之らがいた。明治 19（1886）年、ひどい頭痛を理由に東京大学予備門中退。和歌山に帰省後、羽山繁太郎・蕃次郎兄弟らと親しく交際した。

明治 19（1886）年渡米、サンフランシスコに到着。パシフィック・ビジネス・カレッジに入学するも、程なくミシガン州のランシング農学校に転学。しかしここも長続きせず退学。その後、ミシガン大学の日本人留学生らと親しく交わるが、熊楠は結局同大学へは入学しなかった。明治 24（1891）年、突然のキューバ採集旅行を敢行。曲馬団に加わって巡業する傍ら、植物の採集を行った。

明治 25（1892）年、当時の学問のメッカ・ロンドンへ渡る。明治 26（1893）年、『ネイチャー *Nature*』に処女論文「極東の星座 “The Constellation of the Far East”」が掲載された。以後、同誌及び『ノーツ・アンド・クエリーズ *Notes & Queries*』に多くの論文を投稿することになる。熊楠の『ネイチャー』掲載論文数は（帰国後のものも含め）、実に 50 本に上る。

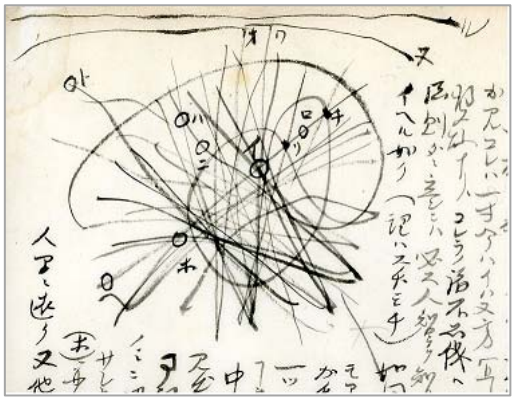
その後、大英博物館東洋図書部長・ロバート・ダグラスの知遇を受け、同館で人類学、性科学、植物学、地理学などの書物を筆写・研究した。この頃、ロンドンで真言僧・土宜法龍 [1]と知り合い、以後親交を深めることになる。法龍がパリに移ってからも、書簡のやり取りを続け、その中で熊楠は「事の学」という独自の思想を構想している。我々は心理

[1] 土宜法龍　1854～1923 年、京都栂尾高山寺住職、のちに高野派管長となる。真言宗聯合総裁、高野山大学総理などを兼任した当時最高の学僧[鶴見 2001：43]。1876 年、慶應義塾別科に入り、福沢諭吉のもとで洋学を学んだ。1893 年 9 月、真言宗を代表してシカゴ万国宗教会議に出席。10 月渡英。10 月 30 日、熊楠と出会う。11 月 4 日、パリへ移る。パリに移ってからも、熊楠と頻繁に書簡のやり取りを行った。11 月 13 日、パリ･ギメ博物館で御法楽の儀を執行。その他、同博物館で、仏教資料の調査･研究･助言を行った。熊楠が帰国後、両者の書簡のやり取りは再び頻繁となる。これらの書簡群は、熊楠の書いたものの中でも、特に思想性が高いものとして珍重されている。1920 年と 1921 年の二度、熊楠は高野山の法龍を訪れている。[中瀬･長谷川 1990：73, 75 参照]

学によって「心」、物理学によって「物」だけを研究しても、決して「実相」を捉えることはできない。両者が交わる処＝「事」を探究し、知らなければならないと、熊楠は主張した。

ロンドンでは、中国の革命家・孫文とも知り合っている。孫文が離英するまでの約三ヵ月間、二人は連日のように往来して親交を結んでいる。孫文は、熊楠との別れに際して、熊楠の日記帳の余白に「海外逢知音」と記している。「知音」とは、最大の理解者である友人を指す言葉である。

明治 31（1898）年、大英博物館内でイギリス人を殴打（熊楠は日頃からこのイギリス人によって嫌がらせを受けていたという）し、さらに翌年には再び館内で紛争を起こし、ついに同館から追放される。明治 33（1900）年、経済的理由などから帰国。帰国後、明治 34（1901）年から明治 37（1904）年まで、主に那智・熊野山中に孤居し、生物採集、深層心理学等に没頭した。この時期、法龍との往復書簡において、熊楠の思想の中核である「南方曼陀羅」（下図〔写真(ｉ)〕、この「南方曼陀羅」という名称は、鶴見和子によってこの図を見せられた中村元が付けたものである）が記された。それはあまりにも深遠で、ここで全貌を詳細に解説することはできないが、その概要をごく簡単に述べると以下のようになる。我々の生きるこの世界は、物理学などによって知ることのできる「物不思議」と呼ばれる領域、心理学などによって研究可能な領域である「心不思議」、そして両者が交わるところに現われる「事不思議」という領域、さらに推論・予知、いわば「第六感」で知ることができるような領域である「理不思議」によって成り立っている。そして、これらは人智を超えて、もはや知ることは不可能な「大不思議」によって包まれている。「大不思議」には内も外もなく、区別も対立もない。それは「完全」であるとともに「無」でもある。そしてその図の中心にあたる部分を、熊楠は「萃点（すいてん）」と名付けている。それは、さまざまな因果が交錯する一点でもあり、熊楠によると、「萃点」からものごとを考えることが、問題解決の最も近道であるという。



写真(ｉ)「南方曼陀羅」[1903 年 7 月 18 日付土宜法龍宛書簡]、『全集 7』平凡社、1971 p.365
写真提供：南方熊楠顕彰館

明治 37（1904）年 2 月に、英国心霊現象研究協会（通称 S.P.R.）の重鎮・フレデリック・マイヤーズの大著『ヒューマン・パーソナリティー *Human Personality and*

Its Survival of Bodily Death part 1 & 2』を入手、二ヵ月かけて読破した。『ヒューマン・パーソナリティー』は、それまで否定的であった、熊楠のオカルティズムに対する考え方を大きく変えた書物である。

明治 37（1904）年 10 月、那智山を下山し、田辺へ移る。明治 39（1906）年、結婚。翌年には長男・熊弥が生まれる。明治 42（1909）年、『牟婁新報』に神社合祀に対する反対意見を発表し、以後、本格的に「神社合祀反対運動」を開始する。一方で、『ネイチャー』、『ノーツ・アンド・クエリーズ』は勿論、日本の雑誌・新聞においても、民俗学を中心に、夥しい数の論考を発表し始める。明治 43（1910）年、神社合祀推進論者の県史に面会しようと講習会に大酔して乱入し、「家宅侵入罪」で 18 日間拘留されることになる。明治 44（1911）年、柳田国男より来信。以後、頻繁に書簡のやり取りを行う。同年、長女・文枝誕生。熊楠は、帰国後、二度に渡りアメリカ農務省・スウィングルから召聘されているが、これを固辞している。熊楠は生涯、官僚は勿論、大学、学会などには一切所属することなく、独学の道を歩んだ。

1916（大正 6）年、自宅の柿の木から新種の粘菌を発見する。これまで粘菌は朽木に生息するというのが「常識」であったが、熊楠は生きた柿の木から粘菌を発見した。これは当時の粘菌学の権威・グリエルマ・リスターによって、「ミナカテルラ・ロンギフィラ」と命名された。

大正 11（1922）年から、南方植物研究所資金募集のため、上京し奔走するが、弟・常楠との不和が基で、同研究所設立はふいとなってしまった。大正 14（1925）年、長男・熊弥が精神的な病（統合失調症）を発症、入院。その後、熊弥の病状は一進一退を繰り返すことになる。そのような中、大正 15（1926）年には『南方閑話』、『南方随筆』、『続南方随筆』を出版する。熊楠の生前の著作は、この三冊のみであった。昭和 2（1927）年、自宅療養中であった熊弥の病状が悪化し、膨大な数の粘菌図譜が破毀されたという。

昭和 4（1929）年、天皇を田辺湾神島に迎え、長門艦上にて進講し、粘菌標本 110 点を進献する。その際、粘菌の標本をキャラメル箱に入れて献上したという話は非常に有名である。戦後、昭和天皇はそのときの出来事を思い出し、渋沢敬三に「それでいいじゃないか」と笑って話されたという。

昭和 16（1941）年、萎縮腎に黄疸を併発し、自宅で 74 歳の生涯を閉じた。本人からの

たっての希望で、熊楠の脳は解剖され、脳髄は大阪帝国大学医学部病理学教室に保存されることになった。

※

熊楠の人生は、さまざまな伝説に彩られている。非常に激高しやすい性格で、気に入らない者には反吐を吐きかけたり、多汗症のため（特に夏季は）、半裸で過ごしたりするなど奇行の多かった人物としても知られている。「キューバ革命に参加し左胸を負傷した」、あるいは「ロンドンの清国大使館に幽閉されていた孫文を夜な夜な忍び込んで救出した」、などといった伝説はまさに「伝説」で、熊楠自身、あるいは周りの人間の創作物語であるが、未だに前者は『ブリタニカ国際大百科事典 2004』などには堂々と載せてあったりもする。しかし、そういった「伝説」が真実だと信じられてしまうほどに、熊楠の人生、人柄は魅力的かつ劇的で我々を惹きつけて止まない、と言うこともできるであろう。

さまざまな伝説を持つ熊楠であるが、特に「記憶」に関するものは非常に多い。しかしキューバ革命参戦や孫文救出劇などとは異なり、それらの殆どが、彼の努力に裏打ちされたものである。例えば熊楠は、英語・フランス語・ギリシャ語・ラテン語・ロシア語など十数ヵ国語を解したと言われている。実際には五、六ヵ国語とする説もあるが、最大で十八ヵ国語を操ったとする説もあり、未だ定説はない。しかし、いずれにせよ、その語学力は「常人」離れしたものであることに変りはない。そのような熊楠の驚異的な記憶力は、実は並々ならぬ努力の賜物であった。熊楠の晩年の高弟・雑賀貞次郎の言葉は、そのことを端的に表している。

> 【熊楠の】記憶力の超人的だつたことは、それは勿論天稟であつたらう。しかしこうした【抜書等に見られる】努力の集積は見のがされぬ。先生は私に対して「本をよむにはそれを写すがよい、写すとよく覚えられる」とさとされたことがある。私の気力はとてもそれを実行しえなかつたが、先生のこれらの筆跡を拝見して、何ともいへぬ感に打たれたのであつた。――つまり天才とは努力だ。
>
> [雑賀 1942, 飯倉 1974 所収：230]（【 】内―唐澤）

熊楠は、民俗学関係を中心とした論考を数多く発表しているが、その中でも特に『十二

支考』は、今でも広く読まれている著作であり、熊楠の幅広い知識の集大成の一つであると言える。「エコロジー（植物棲態学）」という言葉を掲げ、神社合祀反対運動で、最も力を入れて守った「神島（かしま）」（和歌山県田辺市）は、昭和 11（1936）年、史蹟名勝天然記念物に指定された。また平成 16（2004）年には、熊野古道を含む「紀伊山地の霊場と参詣道」が、世界遺産に認定されたが、特に田辺から本宮へのメインルートである中辺路は、熊楠の活躍がなければ登録されていなかった可能性が高かったとさえ言われている。中辺路には、継桜王子社の境内にある、有名な「野中の一方杉」と呼ばれる巨杉群（不思議なことに、これらの巨杉はみな同じように南にある熊野那智大社を慕うように枝を伸ばしている）がある。この巨杉群は、いわゆる『南方二書』[2)]によって識者に知られるところとなり、何とかその古態を留めることができたと言われている。

参考文献

・雑賀貞次郎、「南方熊楠先生を語る」、1942（飯倉照平編、『南方熊楠　人と思想』、平凡社、1974 所収）

・飯倉照平、『南方熊楠　梟のごとく黙坐しおる』、ミネルヴァ書房、2006

・鶴見和子、『南方熊楠・萃点の思想―未来のパラダイム転換に向けて―』、藤原書店、2001

・中沢新一、『森のバロック』、せりか書房、1992

・中瀬喜陽・長谷川興蔵編　、『南方熊楠アルバム』、八坂書房、1990

・松居竜五・月川和雄・中瀬喜陽・桐本東太編、『南方熊楠を知る事典』、講談社現代新書、1993

・安田忠典、「南方熊楠と熊野古道―世界遺産百年前―」、2005（松居竜五・岩崎仁編、『南方熊楠の森』、方丈堂出版、2005 所収）

2) 『南方二書』とは、熊楠が、東大で植物学の教授をしていた松村任三（1856～1928 年）に宛てた手紙であると同時に熊楠の「主著」でもある。明治 44（1911）年 11 月、柳田国男によって刊行され、識者に配布された。この手紙は「神社合祀」に対する反対意見書であり、熊楠は最初から公になるものとして書いたと思われる[松居他　1993：526-527　参照]。『南方二書』で、熊楠は「熊野には今日古熊野街道の面影を百分の一たりとも忍ばしめるところはここあるのみ」「熊野街道の風景を添うることおびただし」などと述べている。つまり、熊楠は神社や社叢は勿論だが、熊野古道そのものにも注目していたのである[安田 2005, 松居・岩崎 2005 所収:28 参照]。